序

この本は，著者が水声社から刊行しているロシア語文法シリーズの最後の一冊として書いたものです。

1996 年に『ロシア文法の要点』を刊行して以来，著者は，このシリーズを通して，ロシア語学に関するひとつの体系を作ろうとしてきました。この企図がどのくらい実現したかはわかりませんが，シリーズ最後の一冊として，古代教会スラヴ語の入門書を書くのは，必然のなりゆきでした。古代教会スラヴ語は，すべてのスラヴ文章語の母体となった言語であり，ロシア語学習にとっても，その知識は不可欠のものだからです。

古代教会スラヴ語の文法書は，世界中で数多く刊行されています。したがって，過去に述べられたことをまとめ直すことはできても，新しい知見を付け加えるのは，まず不可能です。著者は，現代ロシア語を学ぶ日本の学習者にとって，どのようなまとめ方がもっとも分かりやすいか，ということをもっぱら考えて，この本を執筆しました。

古代教会スラヴ語の入門書としては，日本でも小川利治先生の『［古代］教会スラヴ語文法』と，木村彰一先生の『古代教会スラブ語入門』がすでに刊行されています。小川先生の著作は，日本で初めての古代教会スラヴ語の入門書として貴重なものですし，木村先生の著作は，この分野の本の決定版として，これからも，多くの学習者，研究者に読まれ続けていくものだと思います。

本書は，小川，木村両先生の著作のような広く大きな意図を持ったものではなく，「現代ロシア語をよりよく知るための」という但し書きのついた古代教会スラヴ語の入門書です。著者の従来からの方針に従って，例文を多く採るようにしましたし，古代教会スラヴ語と現代ロシア語の関係（前者は南スラヴ系の言語，後者は東スラヴ系の言語ですが，両者の間には，なお大きな関連があります）に

ついて，随所で触れるようにしました。また，動詞についてのまとめ方（動詞の説明が，全体の半分以上を占めています）には，いままでのものと違う部分があるかもしれません。

古代教会スラヴ語をめぐる社会的，文化的背景については，いろいろな本の中で言及されています。近年は服部文昭氏の『古代スラヴ語の世界史』（白水社）という興味深い本が刊行されましたし，著者自身も『キリール文字の誕生』という本を上智大学出版から上梓しています。これらの知識については，この本の中では触れていません。

また，古代教会スラヴ語の文法書には，音韻に関する詳しい説明が不可欠なのですが，この部分は，2009 年に同じシリーズの一環として刊行した『共通スラヴ語音韻論概説』の中で説明しましたので，本書では最低限のことにしか触れていません。『共通スラヴ語音韻論概説』は，古代教会スラヴ語入門の音韻論編を兼ねているといってもいいので，本書では，しばしば関連個所に言及しています。著者がこれまでに書いた他の本（『ロシア語史講話』，『ロシア文法の要点』，『ロシア語の体の用法』）への言及もおこないました。

『ロシア文法の要点』を出版していただいたときからの長いおつきあいである水声社の鈴木宏氏には，今回も最大限の配慮をしていただきました。改めて謝意を表します。面倒な編集作業を受けもってくださった同社の板垣賢太氏にも，併せ謝意を表します。

なお，この序の初めで，「最後の一冊」というようなことを書きましたが，この手の本には，まとまった選文集（хрестоматия）が付されていなければいけません。この選文集は，本書の別冊として，別途，執筆する予定です。

動詞の構造

§28：現代ロシア語を学んだ人が，古代教会スラヴ語の文献を読もうとする場合，まず必要なのは，動詞の体系を理解することであると思われます。現代ロシア語と古代教会スラヴ語の動詞の体系の違いに慣れれば，じっさいの文献はかなり読みやすくなりますし，動詞の諸形態が形成される過程でおこる音変化を把握すれば，他の品詞の理解にも役立ちます。そこで，本書では，形態論の最初に，動詞の説明をもってくることにしました。

§29：古代教会スラヴ語の動詞を理解するためには，その二重構造について，よく知っておかねばなりません。現代ロシア語でも多用される動詞を使って，この事情をまず説明しておきましょう。

現代ロシア語の лететь という動詞を考えましょう。古代教会スラヴ語では，この動詞の不定形は **лєтѣти**，現在形 3 人称単数の形は **лєтитъ** です。

不定形の **лєтѣти** は，語根 let (**лєт**) と，不定形の語尾 ti (**ти**) に，不定形を作るテーマ母音 ě (**ѣ**) をはさんだ形で成り立っています。そして，語根とテーマ母音をあわせた全体を不定形語幹[1] と呼びます。テーマというのは，「語幹」という意味で，テーマ母音は語幹母音と呼ばれることもあります。

let-ě-ti (**<u>лєт-ѣ</u>-ти**)
不定形語幹

1「過去語幹」が正しい用語ですが，本書では「不定形語幹」という用語を使うことにします。

一方，現在形 3 人称単数の **лєтитъ** は，語根 let (**лєт**) と，現在形 3 人称単数の語尾 tŭ (**тъ**) に，現在形を作るテーマ母音 i (**и**) をはさんだ形で成り立っています。そして，語根とテーマ母音をあわせた全体を現在語幹[1] と呼びます。

let-i-tŭ (**<u>лєт-и</u>-тъ**)
　　現在語幹

上の両者をあわせると，以下のような図ができます（以下は，キリール文字のみの表記にします)。

лєт-ѣ-ти
лєт-и-тъ

この図が，古代教会スラヴ語の動詞の構造を表す基本的な図です。

不定形を作るテーマ母音は a (**а**), ě (**ѣ**), i (**и**) の 3 つですが，テーマ母音が存在しない動詞もあります。現在形を作るテーマ母音は e (**є**)（現代ロシア語の第 1 変化動詞に相当する動詞の場合）ないし i (**и**)（現代ロシア語の第 2 変化動詞に相当する動詞の場合）ですが，テーマ母音が存在しない動詞もあります。

現代ロシア語の брать に当たる動詞 **бьрати** で同じ図を作ってみます。

бьр-а-ти
бєр-є-тъ

この場合，不定形語幹は **бьра**，現在語幹は **бєрє** で，不定形語幹を作る語根と現在語幹を作る語根のあいだに **ь-є** という母音交替があります。

今度は，現代ロシア語の нести に当たる動詞 **нєсти** で，上と同じ図を作ってみましょう。

нєс-ф-ти
нєс-є-тъ

不定形語幹を作るテーマ母音の ф はゼロ，つまり存在しないことを表します。

また，現代ロシア語の вести に当たる動詞 **вєсти** の場合は，不定形において，dt (**дт**) が異化の作用によって st (**ст**) に変わります（→『共通スラヴ語音韻論概

1「非過去語幹」が正しい用語ですが，本書では「現在語幹」という用語を使うことにします。